

四国農学連報

第 28 号

発 行 者 大 学 校 盟
四 国 地 区 農 業 大 学 校 連 盟
編 集 大 学 校 会
高 知 県 立 農 業 大 学 校 自 治 会
学 生 自 治 会

農大の仲間との出会い

四国地区農業大学校学生連盟会長
高知県立農業大学校学生自治会長

岡 林 司



私は昨年
2月に自治会
長として選ば
れましたが、
当初は自分が
学生の代表者

としてのリーダーシップとか、人前での挨拶に自信がなく、果たして自分の務まるか不安を感じていました。

昨年度に続いて今年度も、9月までは新型コロナウイルスの影響で「よきこい祭り」や「四国農学連スポーツ大会」が中止になるなど、活動に大きな制約を受けながらの一年となりました。

毎年8月に参加していた「よきこい祭り」は昨年に続いて今年も中止となってしまいました。農大の伝統とし

て参加を続けてきた行事でもありますが、私たちの学年は参加することなく卒業となってしまいました。学生一同楽しみにしていただけにたいへん残念ではありましたが、これまで農大の先輩方が伝えてこられた、踊りの振り付けを途切れさせることだけはしたくないと気持ちを切り替えて何度も1年生と練習を重ね、また次の学年に伝えることができました。

四国農学連スポーツ大会についても、2年連続で中止の決断をせざるを得ませんでした。他県との交流はできなくなりましたが、校内でサッカーやテニスといったリスクの少ない屋外スポーツ大会を開催しました。運営を自治会で行いましたが、一般の学生も一緒にあって怪我もなく、大会を円滑に終わらせることができました。

秋以降は新型コロナウイルスの警戒レベルも下がり、11月の「農大祭」、12月の「四国農学連意見発表会」(全国農業大学校等交換大会四国ブロック

意見発表代表者選考会)も開催することができました。

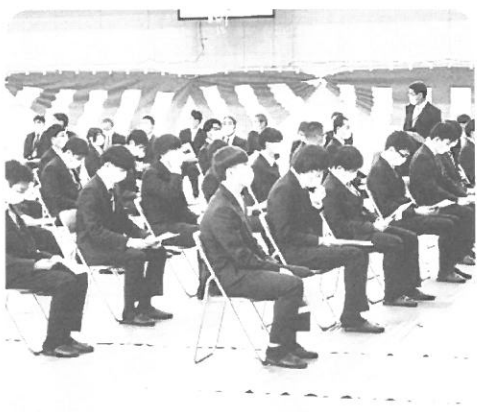
農大祭は、収穫物の販売以外は食べ物のお店を行わないなど、以前よりは縮小しながらでしたが、その分くじ引きやイモ掘りなどの楽しんでいただけの企画を準備し、本当に多くの方に楽しんでいただけました。やはり果樹専攻が収穫したナシの人気はすごい反響がありました。意見発表会でも学生で役割を分担し、当番校として無事運営を終えることができました。

私は実家がナス農家で、農大でも園芸学科で野菜を専攻しましたが、実家と違う作物を勉強したいと考え、プロジェクトはピーマンの品種比較を行いました。私が着目したのは収量よりも収穫の効率です。ピーマンはナスに比べ、収穫時の雇用労力を活用する場面が多い品目ですが、実際に体験してみても、ピーマンは重さにより規格の区分がナスより細かく、最適なM規格を効率的に収穫するには、かなりの熟練が必要だと感じました。当初はそれを品種で解決することを目指していましたが、プロジェクトをまとめていく中で品種により種や肉厚が異なることに気づきました。そこで一歩踏み込んで、どの品種でもM規格がわかるよう果長と果径を元にした鑄型のような標本を

発案し、高く評価していただきました。収穫時間や労働強度といった数字だけでなく、実際に使いやすい形を提案できたことは実家の体験だけでなく、実践的な面積での実習や先進農家等留学研修で実際の農業経営を体験した学びによるものでした。

農大で、ともに汗を流して作業してきた友人はすばらしいです。人が困っていたら助け、行事・自治会活動・プロジェクトをみんなでも乗り越えてきました。私もリーダーシップを発揮するよりも助けられることのほうが多かったと思います。

農大を卒業し、私は就農します。同級生で就農する人は少なくないので、今後は良きライバルとして競い合いたいと思っています。



コロナ下での農業大学校と

これからの姿

高知県立農業大学校 校長 松村 栄子



令和三年度は、二年度に引き続き新型コロナウイルス感染症への対応に振り

回された年になりました。

高知県では5月中旬から感染者数が増加し、8月中旬から9月上旬にかけては1日当たり100人を上回る日もあるなど学校運営はかりか日常生活にも大きな影響を受けながらの一年となりました。高知農大では6月に予定していた大阪での園芸流通研修、8月の「よさこい祭り」、10月の四国農学連スポーツ大会など多くの研修・行事が中止となりました。寮のロビーや食堂も対面を避け、学年別に食事時間をずらしたり、授業の体育や農産加工実習も内容の見直

しを行うなど、学生の皆さんが入学時に期待していた農大生活が十分できなかったのではないかと残念に思っております。

このようにコロナに振り回される学生生活を送らざるを得ない、今の農大生に求められるもの、これからの農大に求められるものを少し考えてみたいと思います。

高知農大ではここ数年、農業法人からの求人が増加しています。その際に求められるのが「社会性」です。遅刻しないのはあたり前ですが、挨拶ができる、自発的に仕事を覚える、社員の方との良好なコミュニケーションなどといった、私たち古い世代が常識と捉え、教えられるものではないと考えていたこれらのことが、今の若い世代の人にはなかなかできないし、難しいようです。社会人として常識的なふるまいができるよう指導

する行事や団体行動がコロナにより制約を受けたことも大きな痛手でした。

このため今年、高知農大としては、屋外を活用した低リスク種目を用いたスポーツ大会や県内での園芸流通研修、ハローワーク等の機関と連携し、進路に関する科目を行うなど代替カリキュラムを実施しました。来年度からはキャリア形成に関する講義や演習、体育の科目時間を増やし、自分の将来像を自ら描き、高い社会性、協調性を持って自発的な就職活動や就農、進学に臨める人材を育成していきたいと考えています。

必要があります。

一方就農する学生にとっては、現在高知県が進める先進的、データ駆動型で省力的なスマート農業に関する知識や実践力を身につけることが急務となっております。

これからの農業大学校は、全体的に社会性の強化をはかりながら、そこで引き出された学生個々の進路に応じて選択の幅のある柔軟なカリキュラムを提供していきます。高知県農業の核となる高い社会性と技術力を備えた人材を育成することで、卒業後はこれまで以上に幅広い分野で活躍していただきたいと期待をしています。

今後も農業大学校が、より活気のある学びの場として、また、生涯の友との交流の場として発展していくことを祈念してやみませ



私が考える日本農業の課題

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

澤 田 英 之



農業は、欠かすことのできない重要な職業です。なぜなら、人々の食事だけで

なく、環境の保全、伝統文化の継承などは、農業の存在なしで成り立たないからです。現在、日本の農業は、後継者不足をはじめ様々な課題を抱えています。その背景には、「稼げない」、「泥臭い作業」といった若者の農業に対するネガティブなイメージがあると思います。しかし、年間一千万円以上の売り上げを達成している農家も数多く、私は、工夫次第で稼ぐことのできる職業だと考えています。今回は、私が考える日本の農業における課題を二点取り上げ、問題の解決方法について検討しました。

一つ目の課題は、後継者となる若者の減少です。農林水産省のデータによると、農業戸数は、一九五〇年をピークとして減少し続けています。二〇二〇年の販売農家が、一〇二万八千戸と、ここ二〇年間で半分以下となっていることを知った時には、大きな衝撃を受けました。その要因として、少子高齢化に伴う全国的な出生率の低下も考え

られますが、私は、第2次、第3次産業の発達やインターネットの普及等、若者が農業について学び、実際に触れる機会が減ってきたことが影響していると思います。そのため、若者が幼少期から農業に触れ理解を深めることが重要だと考えています。具体的には、小学校・中学校・高等学校などの総合的学習の時間を利用し、花卉や作物の栽培を行い、農業に触れる機会をさらに増やすことが大切だと思います。その際には、農家を講師として招くことで、作物や花卉を育てることの楽しさやインターネット等では知れない現場の声を伝えることができ、若者の気を引くことにつながるのではないかと思います。

二つ目の課題は、農業による収入が天候や自然災害などの影響を受けることです。日本農業新聞によると、二〇一九年の大型の台風十九号が通過した際には、河川の氾濫による稲の倒伏やビニールハウスの倒壊など多数の被害が報告され、被害額は約三千億円を超えたとされています。

農業は、天候と災害の影響を大きく受けます。しかし、逆に天候による被害や自然災害を避けることができれば、安定した収入を得られると思います。

また、新規就農時における資金調達も課題です。全国新規就農センターが行った調査によると、新規就農者が用意した自己資金は、土地取得代を除いても平均五六九万円だということです。これだけの資金を若者が集めることは難しいように思います。そのため、地方自治体と協力して、耕作放棄地や農業機械を新規就農者が格安で取得できる環境（農業ネットワーク）を構築していく必要があると考えます。このようなネットワークの構築は、耕作放棄地でのトラブルや高額な初期投資を抑えることができるだけでなく、新しい加工品の開発など、特産品を生み出すきっかけにもなるのではないかと思います。



農場実習でイチゴの調整作業

に受けられる制度作りが必要だと思います。

これまで述べたように、私たちの食と深くかわる農業には、様々な課題があります。私たちは、若い力でこれらの課題を乗り越えることができず。私はこれらの課題を解決できる人材になれるよう様々なことにこれからも取り組んでいきたいと考えています。

農業の原点

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

樋 渡 智 也



農業は、原点にして頂点だと思いません。農業は一次産業に分類され、ほかに

林業、漁業などがありますが、林業は、



農場実習にてマルチへの定植用穴あけ作業

苗木を育てるのに二、四年かかるといわれています。漁業は、自然に増減する漁獲量に左右されるし、遠洋漁業では長く帰れないこともあり得ます。しかし、野菜は一年で収穫できるし、ハウスなどを使えば全天候型です。

日本は、色々なものが便利に進化してきました。しかし、他産業の進展してきた速度と比べると農業はほとんど進化していないようにすら思えます。その必要がなかったのか、あるいは進化できなかったのかは、わかりませんが、これから確実に進化していくことが求められてくると思います。日本は、少子化や高齢化に直面しています。これらの社会問題は農業と関連性が無いように思えますが、少子化問題がもっと深刻化していけば新しく農業を始めようとする人が今よりもさらに減るといえます。また、農業は半分以上の人が六五歳以上を占めるため新型コロナウイルスなどの新たな感染症に対して重症化率も高く、農業者人口に与える

影響が大きいとも考えられます。新規就農者数が減少している原因は、気温などの労働環境が厳しいことや、収入が不安定な点などがあげられると思います。夏の暑さと冬の寒さの差はとて極端で、農業は基本的に屋外での作業が中心です。人間を相手にする場面もありますが、農業は自然が相手なので、大きな自然災害が来ると大ダメージを受けることになり得ます。そうなる収入が安定せず、再投資も大きくなってしまいます。

一方、農業にはメリットも多くあります。家族同士で協力して作業するよきな場合は、家族との時間が増え、好きな時に休憩できるため、育児にも積極的に参加できます。一人でする作業は、コミュニケーションが苦手な人でも大丈夫。生活リズムが整い、朝起きて、作業して、日が暮れたら終わるため、睡眠時間がしっかりとれます。

しかし、それでもデメリットに対する対策を考えてみたいと思います。まず、人を増やすにはどうしたらいいでしょうか。一番は、現在の技能実習の制度を拡充させていくことがまずは大切だと思えます。その人が学んだことを祖国で活かせば国の発展にもつながります。

次に、土地の対策を考えます。新しく農業を始める人は、農家のもとで働き、経営を引き継げれば、初期投資や土地問題も解

決すると思います。そして、いろいろなことを解決してくれるのが団体で農業をすることです。特に大きいのは、コスト低減です。トラクターは、一台何百万円もします。団体では、一人一台は必要なく、それぞれの事情に合わせて共有すればいいでしょう。

ここまでは、よくある農業のメリットやデメリットの解決策を述べてきました。しかし、これでは退化しなくなるとは、進化しません。皆さんは、日本という国にどんなイメージを持っているんですか？僕は一番最初に思い浮かんだのが「職人」というワードです。職人が丹精込めたものは、壊れにくい。生産性に関してはロボットに完敗かもしれませんが、品質ではいい勝負をするかもしれないからです。

このことからこれからの農業は、量よりも質を大事にして欲しい。このことを強く思ったのが、食品ロスの話題です。皆さんは、高級な物は大事にするし、味わって食べようと思いませんか。この考えが食品ロスを少しでも減らせるのではないのでしょうか。食事からは贅沢をしてもいいと思います。日本が本気を出せば、世界も相手にできる技術を、持っているのです。高品質な農作物で世界を相手に勝負をするべきだと思っています。

農業ってなんや？

香川県立農業大学校

果樹園芸コース 一年

小倉 慎 矢



僕は兵庫県西宮市で生まれ育ちました。周りにはマンションが並んでいる農業とは疎遠な場所でした。そのため、農業には力仕事・年中無休・収入が安定しないなどマイナスなイメージが強くありました。

そんな僕が農業大学校に入学した理由は香川県に住んでいる祖父にありま。僕は元々農業とは関係のない会社で働こうとしていましたが、祖父に「知り合いを作りに行け」という理由で農業大学校を勧められ、当時はあまり興味のない農業の学校に入学しました。果樹コースを選んだ理由もフルーツが好きだから、イチゴやブドウ、ミカンを食べたいという理由だったので、イチゴは果樹ではないということを入学してから知ったほど農業に関する知識がありませんでした。しかし、農業大学校に入ってから色々な事を学び、農業に対する関心が高まり、やってみたい事が増えてきました。

農業大学校の授業や実習では好奇心を煽られることが多くあります。土壌肥料の勉強をすれば土壌の改良をしてみた

いと思ったり、雑草学を学べば雑草を一気に枯らせるような薬を開発してみたいと思ったりと、農業の中にも沢山の課題があり、それを研究する仕事があることを知りました。

農場実習ではブドウの樹一本を任せ、新梢・副梢管理から花穂整形・ジベレリン処理・袋がけなどの作業を行いました。自分で作った形も綺麗に出来上がったブドウを収穫し、食べてとても美味しく感動し、やり甲斐を見つけたことができました。

農家実習では辛いと思う事もありました。農業の生の職場を体験して一番初めに思った事は「しんどい」ということです。売り物となるので、果実を丁寧に扱うため神経を使います。さらに歩くだけでも肉休労働になるような面積の農場で仕事の「しんどさ」を実感しました。しかし、経営というのはどういふものなのか、学校では学べない事を学ぶことができました。特に実習先農家の「誰もやっていない事を続け、挑戦する人が成功する。」という言葉は印象に残りました。

そんな学校生活で、最近新たにやりたいことが増えました。それは農業従事者を増やす事です。日本の基幹的農業従事者は年々減少し、その結果、耕作放棄地が増え、美しい農村の風景が破壊されています。

僕は農地が管理され、美しい町を作るため、沢山のの人に農業に触れる機会を作り、農業従事者になるきっかけを

作りたいたいと考えています。しかし、僕が最初に持っていたような、農業にマインスマイメージを持ち、自分からしたいと言う人は少ないと思います。

それを覆すには、僕が農業大学校で農業に関心を持ったように、身近な所で簡単に農業に触れる機会をまず増やすことが大切だと思います。

例えば、SNSでマンシヨンのペランダのような狭い場所でも美味しい農作物を作る方法や作った農作物の料理方法を紹介し、農業に関心を持ってくれる人を少しずつでも増やしていく地道な活動が必要だと思います。他にもスポーツと農業を組み合わせる農業の良さを伝えるなど、幅広い年齢層を視野に入れた農業を紹介する方法をもっと探していきたいと思います。そのため、今後の学校生活で技術



農大果樹園でミカンの収穫作業

や知識を深めるのはもちろん、人を呼び込むための集客能力や企画力、技術を伝えるための会話力を身につけられるように努力したいと思っています。

農業の次世代の担い手不足について

香川県立農業大学校
造園緑化コース 一年

北原 優哉



日本の農業は深刻な高齢化の問題を抱えています。日本は国内生産額で見

れば世界でも上位に位置する農業大国です。しかし、二〇二〇年の日本の農業従事者数(個人経営体)は一三六万人と五年前にくらべて三九万人も少なくなっており、減少の一途をたどっています。このうちの七割近くを六五歳以上が占め、四九歳以下の働き盛りはわずか一〇%ということが非常に大きな問題となっています。農業の高齢化

と後継者不足は年が経つごとに深刻になっていきます。高齢者が中心となっている農家では多くの人が「自分中心」で切り盛りしていて、手伝ってくれる人もいないため、農作業中の事故も減少していません。

脱サラして農業を始める人もいますが、機械を購入するにしても相当な初期費用が必要となります。農業をするために借金をするというのは、若者にとつてとてもハードルが高いと思います。そこで地域ごとの対策だけではなく、国全体でさらに後継者対策を考えて欲しいと思います。具体的な対策としては、若い世代の育成や地域による収穫期の協力体制を強めること、さらに外国人技能実習制度の積極的な活用などを推奨します。しかし、小さな対策では限りがあると思うので、若い世代の農業就業人口を増やすために、農業にメリットを増やすことを考える必要があると思います。

私が思う農業の最大のメリットは自分のペースで好きなように仕事ができるという点です。「自然に触れながら自分のペースで自分の裁量で仕事ができる」。まさに脱サラ農業の夢そのものだと思います。二つ目のメリットは、やり方によっては多くの年収をあげることができるとい点です。生産方法を工夫したり、改善し、規模を大きくすることで農業の利益は大きくなり、やったらやっただけの報酬が手に入ると思います。



農場実習で校内生垣を剪定

一つ私が日頃気になっている問題は、テレビやネットなどで農業に対するネガティブな情報が流れてくるということです。テレビやネットなどの各メディアが「収入が安定しない」、「辛くて厳しい」という情報を流せば、その影響力は計り知れません。日本の農業を支えるためには各メディアが協力して農業の魅力やメリットを積極的に伝えていくことが大切だと思います。

農家の後継ぎがない例としては、そもそも子供がいないという場合や、子供が県外などに進学・就職してしまったり、また、結婚などを契機に家を出て行ってしまったという場合などがあります。

法人化した農家では、将来の中核を担う人材を探しています。社員に生産や経営のノウハウを引き継ぎ、会社の存続を図ろうとしています。農家での

農業研修は、高齢の農家の後継ぎ募集に応募するにせよ、農業法人の社員募集に応募するにせよ実地で農業経営や農業技術のスキルを身に付けられるというメリットがあります。農業の成果にはその風土も関係するので自分が就農したいと考える地域で学んだ方が効果がいいと思います。

私はこれから造園をしたいと考えていますが、農業とは無関係ではないので、この問題を改善する手助けをしていきたいと思っています。

畜産技術者を夢見て

香川県立農業大学校
畜産コース 一年

重松 祐作



私は、小さい頃から動物が好きで、いつかはペットショップの店員さんや動物

園の飼育員さんになるのが夢でした。小学校に入学した頃には犬四頭、猫一匹を飼っていて、動物たちに囲まれた生活をしていました。その後中学三年生になり、自らの進路に迷い、目前に迫った高校進学に悩んでいた私に、担任の先生は、「農業系の高校を選択したらどうか。」というアドバイスをくださいました。そして、動物が好きだった

私は、軽い気持ちで農業高校の畜産科への進学を決めたのです。

高校入学後の一年間は、家畜の飼育技術について広く学びました。畜産科の授業や実習では様々な場面に立ち会うことがあり、正直なところ、大好物の唐揚げや豚カツなどの肉料理を二度と食べる気になれないかもしれないという不安を感じるほどでした。

しかし、授業や実習を通じて、家畜の命をいただくことの大切さを知ることができ、私の不安は払しょくされました。一方、高校二年生の時には、自分たちが飼育・出荷した肉豚を精肉にしてもらい、校内で加工・試食する体験をしたことがあります。

この時、自分たちで初めて加工したウインナーソーセージや生ハムの美味しさに感動したことは今も忘れられません。これら高校時代の経験は、畜産で生きていくという将来の夢を自覚したターニングポイントであったと思います。

現在、香川県立農業大学校では、肉用牛、乳用牛、養豚、養鶏を主体とした講義に加え、大規模化や六次産業化、先進技術の導入に積極的な県内の畜産経営者の下で実習を行っています。実習先の方々には、家畜等の管理業務で忙しいにもかかわらず、様々な体験をさせていただいており、とにかく畜産と関わっている時間が楽しくて仕方ありません。今まで経験したことがない程の大規模な飼育現場で多種多様な家

畜たちと接することができるうえに、加工や販売など様々な現場に立ち会う機会もあり、それを自分自身が体験することで、新たな気づきや多くの知識を会得していることが実感できています。

実際の飼育現場では、ただ動物が好きだという気持ちだけでは経営は成り立ちません。高校から農業大学校での実習を通じて、畜産は家畜に対する愛情と、たゆまぬ努力が極めて重要で、とても繊細な管理が求められることを知りました。家畜をよく観察して、小さな変化にも早く気づき、いつでも対応できる知識や技術を身に付けることと同時に根気よく継続する気構えが重要だと気づかされました。

家畜は私たちが生きるために、その短い命を提供してくれています。人間



子牛移動の準備中

が命をいただく前に死んでしまうことがあつてはなりません。それを避けるためにも、家畜がこの世に生を受けてから短い生涯を終えるまでの間、一生懸命に家畜の世話をすることが大切なのではないのでしょうか。

今後、私は自分なりに家畜と人間の命の絆を消費者の方々にも理解していただけるよう努力していきたいと考えています。

これからは、スマート農業を活用して、高品質な畜産物を生産し、それを利用した加工品までも直接消費者の方々に届けるための戦略的課題にこれまで以上に取組んでいくことが重要です。私は、これらの課題を克服しつつ、地域内のみならずグローバルな展開をして、消費者への安定した食料供給や雇用の創出を行い、社会に貢献していきたいと考えています。そのためには基礎的な畜産の知識や技術はもちろん、様々な資格の取得や加工技術、販売・流通戦略についてもっと勉強しなくてはなりません。

私は香川県立農業大学校に入学して、まだ八ヶ月しか経っていない「ひよっこ」です。

でも、いつかは、色々な人々に認められる畜産技術者になりたいと夢見ています。

農大での二年間

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

農業生産技術コース 二年

坂 東 澁 太



私の祖父母がサツマイモ農家をしており、将来実家を継ぐために必要な専門知識を学ぶため、私は農業大学校に入学しました。しかし、入学当初は、日本全体新型コロナウイルス感染症拡大により、農業大学校も臨時休校を余儀なくされました、不安を抱えていましたが、開校されてすぐに友達ができ安心してことを覚えていきます。

農業大学校には、「学生自治会」と「模倣会社徳島農大そらそうじや」という二つの組織があります。入学当初、私は学生自治会に入ろうと思いましたが、役職は一般幹事になりたいと思っていました。周りの推薦で、自治会副会長を担当することになりました。不安を抱えていましたが、先輩方や先生の手助けにより学校活動に貢献することができました。その中でも一番大変だったことは、自治会副会長になって初めて二年生の手助けを得ずに行う活動である収穫祭です。最初は準備物や役割分担等戸惑うことが多くありましたが、他の役員の助けもあり、無事に

に終わることができました。

二年生になっても、新型コロナウイルス感染症が収まらず昨年と同様にイベントが開催できるか心配でしたが、感染症対策や新型コロナウイルスワクチン接種の効果から徳島県内の感染者数が減少し、小規模ながら学生自治会主催のイベントを開催することができました。

毎年実施している新入生歓迎会は、新型コロナウイルス感染症の影響や、生徒や先生からの希望もあり、コロナ対策を徹底したポータリング大会としました。ゲーム数は少ないですが、一年生と二年生ともに盛り上がりとてもいい歓迎会にできたと思います。しかし、

四国農学連スポーツ大会が二年連続の中止となり、中国四国プロジェクト発表会が、リモートで行われる等、他校の農大生との交流の場になっていただけに、中止やリモート開催はとても残念に思いました。他校との交流が困難でも校内で交流の場を持ちたいと考え、スポーツ大会の代替イベントとして、学生自治会主導で、校内球技大会を二年連続開催しました。また、農大祭については新型コロナウイルス感染症の影響により昨年は開催できませんでした。今年、小規模開催になりましたが、今年、小規模開催になりました。準備や企画、進行について、一年生、二年生とも初めてで不安でしたが、先生や農大卒業生の助力のおかげで、無事に成功することができました。この農大祭の開催で、今までの一年生、二

年生の仲がより深まったのを覚えていきます。

新型コロナウイルス感染症は自治会関係以外にも影響を与えており、模倣会社徳島農大そらそうじやでも校外への販売研修は少なく、毎年参加させていただいているヴォルティス学園祭も開催できない状況となりました。今年、今年よりも校外への販売研修は少なく、一年生のごく一部しかその販売研修に参加できていません。来年度以降の販売活動を行っていくためには、経験不足を補うためきちんとした引継ぎが必要になると思います。



令和3年度農大祭 集合写真

学生自治会も同様で、私たちも経験不足なところが多いところはあります。が、昨年の先輩方から引き継いだことと、自分たちがコロナ禍で経験したことを、来年の二年生にしっかりと引き継いでいくことが重要になると思います。

今年度は新型コロナウイルスの影響が少しずつ収まっており、昨年度より小規模ながらイベントが開催できました。来年度は、コロナ禍で行うことができなかった学校行事や他校との交流ができるようになり、在学生と新入生ともに充実した農業大学の一年になってくれればと願っています。

徳島農大そらそうじゃの活動を通して

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

農業生産技術コース 一年

辻岡拓馬



私は、高校時代に農業を学び農作物の栽培に興味を持つようになったことが

きっかけで徳島県立農業大学校へと進学しました。農業大学校進学前は農業と言えば作物を栽培し、農協などの決まった出荷先に収穫出荷するというイ

メージが私にはありましたが、農業大学校に進学してマーケティング論等を学び農業経営に興味が深まり、自身で販路を開拓し規模を拡大していくことや資金運用について強い興味を持つようになりました。

私に通っている徳島農大には、「学生自治会」に加え「模擬会社徳島農大そらそうじゃ」という組織があります。学生主体で模擬的に会社の経営を行い会社の仕組みを学ぶというもので、自分が興味を持っている分野であることから精力的に活動に取り組みました。その結果私は徳島農大そらそうじゃの代表取締役社長という立場を昨年の3月に先輩方から引き継ぎ、1年間活動を行うこととなりました。

新型コロナウイルス感染症流行以前は、校内で実施される販売研修として準定期産直市「きのべ市」や常設の直売所「ロビー販売」、校外での販売研修である「出張きのべ市」など、県内外で積極的に販売活動を行ってきました。また、魅力的な商品の開発、お客様を引き寄せられるような商品ディスプレイ、接客方法など、学生が主体となって話し合いを重ね、より充実した活動内容を目指してきました。

しかし、私が社長を引き継いだ時には、昨年引き続き新型コロナウイルス感染症が日本各地で猛威を振るっており、私たちの日々の生活も活動自粛せざるを得ない状況でした。

そのような環境の中では「そらそう

じゃの活動も満足に行えないのではなか」と危惧しており、実際本年度はあまり販売活動を実施することができませんでした。そらそうじゃの代表として、どのような活動を行い売上を出すのか、自粛を行っている本年だからこそできることはないのかと頭を悩ませる日々でした。

県内で毎年出店を行っていた徳島ヴォルティス学園祭が中止となり、県外での活動がまだ行えない状況で、そのような中で販売活動を行っていくにはどうすればよいのかを先生方にアドバイスをもらいながら社員と話し合い、新型コロナウイルス感染症対策をしっかりと行つたうえで徳島マルシェにて販売活動を実施することができました。また、昨年度、中止を余儀なくされた農大祭ですが、規模縮小した状態ですが開催することが出来ました。入場制限や、ソーシャル・ディスタンスを確保した列の形成など新型コロナウイルス感染症対策をしっかりと行った状態で開催しました。

組織としては、昨年度までは不定期開催であった社内定例会議を定期開催にする等の内部改革にも努めました。日々の売上をクラウド上にアップロードすることにより売上管理を行い、売れ行きの良い商品の特定や、新しい商品棚を作り商品ディスプレイの工夫を行なうなどしました。従来通りであれば、お客様とのコミュニケーションを図りながら、接客技術を学ぶことがで

きたという思いもありますが、この一年を振り返ってみると、本年のように活動自粛を行っている状況であったからこそ、内部改革に努める等の「今できる事を考える力」を養うことができたのではないかと思います。これらことから、時代の変化に対応し活動を行っていくことの難しさを学ぶことができた一年でした。

社長として至らぬ点が多くあり、社員には迷惑をかけることもありましたが、会社が一致団結し、不況な世界情勢のなかで活動を行うことができたことは何ものにも代えがたい貴重な経験であったと思っています。

私たち学生はこれから社会人としての一歩を踏み出すことになりましたが、徳島農大在学中の様々の経験を自分たちの将来に繋げていきたいと思っています。



販売活動 (徳島マルシェ)

農業や学校生活で

学んだこと

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

農業生産技術コース 二年

今 本 絢 子



私は将来、農業の実習の先生になりたいです。なぜなら、農業大学校で学んだことを色々な人に知ってもらい、農業に興味を持ってもらいたいからです。

私が農業に興味を持ち始めたのは高校生の時でした。実習で自分が心を込めて作った野菜などが立派に育つ所にやりがいや達成感を見出すことができ、先生と作業することに楽しさを感じました。そこで、先生のように農業の楽しさを教えられる人になりたいと思うようになりました。そして、農業に関してもっと様々なことを学んでいきたいと思い、農業大学校に進学しました。ここからは、農大の実習で学んだことと地域農業の課題について述べます。

まず、実習で学んだことについてです。徳島農大には、農業生産技術コースと6次産業ビジネスコースの2つのコースがあります。私は、より深く高度な農業の技術や知識を学びたかった

ので、農業生産技術コースを選択しました。このコースには、畜産、果樹、作物、野菜、花きの各専攻があり、私は動物が好きなので、畜産を専攻しました。

畜産の実習では、肉牛である和牛の世話を中心に、エサやりや掃除を行い、子牛にはミルクもあげています。これらの作業の中でも大切なのが、毎日、牛の体調管理をしてあげる際に悪い所がないかよく観察することです。作業をしている私たちも牛を観察しますが、牛の体調や熱を計って見られるのは獣医師の方です。他にも獣医師の方が、採卵や人工授精をしているところを見学して、こういう風に新しい命ができていくんだと考えたら感動しました。

私もその現場に立ち会い、自分の手で触れ、牛のことを少しでも知りたいと思いました。そこで、私は畜産担当の先生に相談して人工授精師の資格をとることにしました。今年の夏に授業を受けましたが、とても内容が難しかったです。しかし、牛のことを少しでも知り、あの現場に携われると思えば、頑張ることができました。そして、毎日行われる試験も全て合格点で無事に終わることができました。また、来年1月頃に行われる実技試験にも、一生懸命に取り組んでいこうと思います。

これらを通じて、命の重みや日頃の食事に感謝し、「いただきます」と言

うことがどれほど大切かを今まで以上に感じるようになりました。

次に、地域農業の課題についてです。私は、地域農業の課題について高校でも学んできましたし、農業大学校ではさらに興味を持って学ぶようになりました。その中でも特に、農業従事者の高齢化や後継者の減少、地域環境の悪化による鳥獣被害の拡大、そして、農業の収益不足による農業経営者の減少などが、顕著に社会問題になっています。

そこで、農業が抱える問題への対策として私が考えるのは、魅力ある街づくりをすることです。そのために、農業を通じて徳島県の魅力を色々な所に発信していきたいです。さらに、徳島県の健康課題を解決する野菜の研究開発や災害に強い野菜など、SDGsに関する陸の豊かさを守る取り組みをしていけば、農業が今より活性化していくと思います。

現在の農家の高齢化は深刻です。農業従事者の平均年齢は70歳に近づいています。高齢者の方が今の日本の農業を支えています。一方で、現在の農家の子供たちは農業の大変さを直に見て育っているため、なかなか後を継ぐこととせません。このような状況の中で、後継者問題を解決するには、何よりネガティブなイメージを払しょくすることが大切です。そのためにも次世代につながる農業の人材育成にも取り組んでいき、将来農業に関わる仕事に就く

人を増やし、地域の農業を少しでも活性化させていきたいと考えています。この夢を実現するためにも、私は、農業大学校で精一杯勉強に励み、農業の楽しさややりがい、達成感などを教えられる人になりたいです。そして、これからも、農業大学校で学んだことを生かして、社会に貢献していきたいです。



農業生産技術コースの仲間たちと



実家の農業を支える

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

6次産業ビジネスコース 一年

野田日向



ある時、母が「もつと楽に農業ができるようになるように」たらいの「と、つぶやいていました。確かに歳を取ると腰や肩が痛くなるし、農薬を散布するの難しくなってきました。しかし最近では、少しずつ機械も新しくなり、例えば、米の収穫などはとても楽になったそうです。

私の実家は、田畑が一町ほどあり、祖父の代からは兼業で農家をしています。母は、パートの間に祖父母から少しずつ農業について教わり、畑を耕し、種をまき、消毒をし、トンネルを作ったりと、農業が一からできるような頑張っています。私は、暑い日も寒い日も、夜遅くまで働いている祖父母や母を尊敬しており、中学生の頃から農作業を手伝ってきました。

以前は、ほうれん草、人参、キャベツ、えだ豆などを出荷していましたが、祖父の代になってからは、小松菜、ほうれん草、米を出荷しています。米は、もみまきから始めると、かなりの手間が掛かってしまいます。しかし、苗か

ら購入することも可能で、そうすると田植えがかなり楽になります。小松菜やほうれん草なども、最近では農協にお金を払えば、専用の大型機械を使用し、種をまいてくれたり、消毒をしてくれたり、トラクターを引いてくれたりするので、私の実家のような高齢農家では非常に助かります。しかし、それらを利用するにも経費が掛かってしまうのが悩みで、私の実家は家族だけでおこなっています。また、販売を委託するにしても、野菜や米を頑張ってきた割には、あまり高く売ることができません。

私は将来、実家の農業を継ぐにあたって、何か新しいことにチャレンジしたいと考えています。そのためには、様々なことを考えなくてはなりません。まずは良い土をつくるための堆肥や肥料です。これらが良くならない限り、良い作物はできません。土地を良い物にするためには、鶏ふんや牛ふんなどの肥料の材料となる物が必要となります。しかし、それをどうやって運んでくるのか、時々、無料で肥料を提供している所も見かけますが、軽トラでかなりの回数を往復しないと売っている所もありますが、一町分も肥料を購入しようとすると、それだけでかなりの値段となってしまいます。よく、「家の農業を受け継いで儲ければ良いじゃないか」と友人に言われ

ることがあります。しかし、良い土をつくるための堆肥や肥料、高く売れるための販売の工夫など、様々なことを考えなくては利益を出すことができず、農業だけで食べていくことは、今のままでは難しいと実感しています。

たしかに、若い世代の方で起業している人や団体もあります。多くの人は、珍しい作物などを生産し、そこにしかない希少価値を創造したオンラインワンな商品や、地産地消を生かした商品、インターネットを使用したオンラインでのネット販売など、様々な工夫をしています。私も、生産・加工・販売という一連の過程で、何か工夫はできないかと知恵を絞り、アイデアを模索していきたいと思っています。

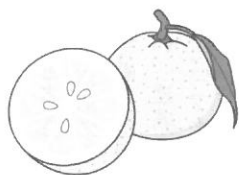
私は農業高校から農業大学校に進学しました。高校では6次産業を中心に学び、その中でも特に加工と販売について学びました。現在、農業大学校では、6次産業ビジネスコースに所属しています。そこで、ゆずとすだちを掛け合わせた柑橘の新品种「阿波すず香」に触れる機会がありました。阿波すず香は、ゆずとすだちの良いところを併せ持った品種で、私はこれをプロジェクトのテーマに取り上げ、阿波すず香に付加価値を付け、地元ならではのオンラインワン商品を開発したいです。

私は、実家の農業を継ぎ、祖父母や母に「農業をやってきてよかった」と思ってもらえるくらい、経営を強くしたいです。そのためには、農業大学校

で加工品開発を中心に生産や販売に実践していきたいです。将来は徳島の農業そして日本の農業の発展に貢献できる担い手になりたいと考えています。



意見発表会後の集合写真



学生生活を通して 学んだこと

愛媛県立農業大学校
総合農学科 二年 果樹コース
学生自治会長

藤原 悠人



私は、昨年
二月に支持を
いただき、本
校自治会長に
選任されまし

たが、昨年同
様、コロナウイルスの影響が懸念され、
不安が募る中、自治会長としての活動
が始まりました。

予期していた通り、今年度も、北海
道の農業体験実習や一部専攻班の県内
先進農家研修、四国農学連スポーツ大
会などの大きなイベントが中止となり
ました。また、愛媛農大にとって一番
の目玉ともいえる十一月の「収穫祭」
についても、毎年多くの方が来場され
混雑が予想されることから、今年度も
残念ながら中止せざるをえませんでした。
ただ、愛媛農大はこのようなこと
では終わりません。自治会役員を筆頭
に動き出し、お互いに意見を出し合い、
この年だけの新たな行事「農大祭」を
発案し、善段接点を持ちにくい一年生
や二年生、異なる専攻班の人同士が交
流を持てるようにと、農大生全員参加
のバーベキュー大会を企画しました。

この交流会では、自治会役員を中心に
事前準備をしましたが、会場設営・調
理・運営だけでなく、最後の片づけま
で学生全員が協力して行えた結果、大
成功に「農大祭」を終えることができ
ました。この行事を行うにあたって自
主的に行動してくれた自治会役員、朝
早くから調理を行ってくれた学友た
ち、運営が滞りなく行えるように忙し
い中、協力していただいた教職員の
方々のおかげで、一つの組織として纏
まることができ、共に行動できた成果
だと感じました。

今年度は、例年がないイレギュラー



今年度限定企画「農大祭」

な状況でした。その中でいかに工夫
し、実践・対策等に取り組めるかが必
要不可欠だったように思えます。今年
度行った行事が来年度も行えるかはわ
かりませんが、私たちの行った活動
は、この愛媛農大にとって大きなもの
となったのではないのでしょうか。

私は、農業大学校卒業後、農業機械
系の企業への就職が決定しています。
省力的で効率的な、誰にでも安全に行
える農業が実現できる、より魅力的な
農業機械を販売したいと考えていま
す。そのために、農業従事者やたくさ
んの人との関わりを大切にし、農業を
多面的に捉え、柔軟な考えや独自の
発想を生み出せるように日々研鑽に努
めたいです。

しかし、これはあくまで通過点にす
ぎません。私の最終目標は、地元愛媛
に戻り、後継者育成に努め、また就農
者として、自分なりの農業のやり方
について模索していきたいと考えていま
す。今の時代、日本の食産業は廃棄量
が多く、自給率等を見ても低い点がよ
く目立ちます。ですがその分、伸びじ
ろのある分野だと思えますし、考え方
次第でたくさん利益を生み出すこと
ができる夢のある産業だと思えます。
そんな農業の将来性をさらに伸ばせる
ように、自分自身が働きかけていき
たいと思います。

最後に、この一年間愛媛農大の自治
会長として活動してきて、学友や教職
員の方々には支えられることばかりで

したが、今までとは違うものの見方や
人とのつながりを感じる事ができま
した。皆様、一年間お世話になりました。
卒業にあたって、共に活動してき
た自治会役員のみんなへ。今後の進路
は様々だと思いますが、自分の夢や
りたいことを後悔の無いように、お互
いに努力していきましょう。

農業大学校での2年間と 今後について

愛媛県立農業大学校
総合農学科 二年 農産園芸コース

新山 耕平



私の親はど
ちらも非農家
だったので、
愛媛県立農業
大学校に入學
するまで、私

は農業と無縁の人生を送ってきました。
そのため農業に対して、「成功し
たらとても儲かる」「始業も終業も早
く、健康な生活が送れる」「自分の試
みに自分で責任がとれる」「温和な人
が多い」「定年退職後に始める方が多
い」などのイメージを持っていました。
加えて農業は後継者不足、体力が必要
なので若いうちに就農すれば優遇され
るのでは！と思いい、農業大学校に入學
しました。

農業大学校に入る前の農業の知識は

ゼロに等しく、なんとなく「卒業したらイチゴを作ろう」と考えていました。当時イチゴは果樹だと思っていたので果樹コースを志望しており、入学試験の面接で「イチゴを作りたいのになんで野菜コースじゃないの？」と問われ、険しい顔で沈黙してしまったのをよく覚えています。

そんな私でも無事農業大学校に入学でき、野菜を学ぶために農産園芸コースを専攻しました。農大での実習は全てが新しい体験で、畝の立て方、播種、定植、防除、耕耘、収穫、撤去など基本作業を学びました。個人的には脇芽が分かりやすいという理由で、トマトの脇芽除去が一番楽しかったです。秋には稲の収穫も体験しました。どういふルートで収穫するかによって作業時間や燃料の消費量が変わり、北海道など土地の広い圃場だとそれらの変動幅はさらに大きくなると知り、とても効率性が求められ、責任重大な作業だと感じました。

二年生からは主に農林水産研究所で実習を行うようになり、私はタマネギと薬草の有機栽培について深く学びました。有機栽培とは化学肥料、農薬、遺伝子組み換え技術を使用しない環境への負荷をできるだけ低減した栽培方法で、消費者の立場から見れば良いこと尽くしの栽培方法です。しかし実際に栽培に関わると、気軽に防除も行えないので病害虫害の発生は多く、梅雨入りの時期や期間の違いでその年の収

穫量が大きく変わるなど安定生産が難しいことを痛感しました。元々農業は自然の環境に大きく依存する業種ですが、その中でも特に自然への依存度が高くシビアな栽培方法だと思いましたが、それでも有機栽培を続ける農家さんには様々な問題を解決するために長年培ってきた技術と揺るぎない信念が感じられ、とても感動しました。

また、農業大学校では学年全員が校外実習としてみかんの収穫を行います。収穫最盛期に実施され、去年は八幡浜、今年も吉田で行いました。ずっと愛媛県にいてもかかわらず、みかんを収穫するのはこれが初めてで、収穫したみかんを傷つけないための「二度切り」という方法や、みかんの入ったキャリーがとても重いということを知りました。それに加えてガードレールも無く、15センチずれたら転落死しそうな道をトラックで迷いなく上がっていく農家さんの運転技術や、ほぼ崖のとても勾配が急な場所に植えられたみかんを平然と収穫する農家さんの姿に驚きました。普段野菜のことばかり学んでいるので身をもって果樹のことも学べるのは貴重な体験でした。

私は農業大学校を卒業後、青果仲卸売業を営んでいる会社で働きます。朝は五時に始業で大変そうですが、市場にどんな農産物が運ばれてくるのか、現在の顧客は何にニーズがあるのかなど、青果物の流通をリアルタイムで知ることができるのでとても楽しそう

です。仕事を通して市場を調査しながらお金を貯めて、いつか生産者として自分の畑で需要のある農作物を作れたらいいなと思います。



水稻の収穫実習



夢

愛媛県立農業大学校

総合農学科 一年 畜産コース

松下彩香



「畜産」という職業に憧れを抱き始めたのは、いつだったでしょうか。きっかけ

は中学一年の時に夢中になった漫画「銀の匙」です。主人公は、将来の目標もなく農業高校へ入学し、初めての畜産・酪農分野や、教科書や数値に縛られない実践経験が、勉強だけに向き合ってきた主人公を大きく成長させます。当時の私は、この主人公と同様に将来に希望を抱いておらず、いつしかこの主人公に自分を重ね、「私も新しい自分を発見したい」「農業や畜産をやってみよう」と思うようになり、私が農業高校へ入学するきっかけとなりました。多くの期待と憧れを胸に、初めて行う本物の農業、畜産を体験できる喜びは何にも代えがたいものでした。豚や鶏の管理作業から始まり、鶏のと殺・解体作業、豚の分娩介助など。最初は何度も失敗を重ね、思い通りにならないことが多かったです。しかし、未熟ながらも成長していく実感は、私の中にある夢を芽生えさせてくれたのです。それは「畜産のスペシャリスト」になることです。



私は将来就きたい仕事に明確に決まっています。私にとって畜産全てが魅力的で、全ての分野を更に詳しく学びたいと強く感じています。また、この夢を抱くことになった理由として、高校時代の恩師が影響しています。その恩師は間違いなく「畜産のスペシャリスト」であり、畜産全ての分野に精通していました。畜産の知識はもちろん、効率的かつ素早く丁寧に作業をする姿に感銘を受け、この人を超えたいと考えるようになりました。そのため、農業大学校で講義や実習を積極的に取り組むことはもちろん、三つのことを重点的に学んでいきたいと思っています。

一つ目は肉牛、酪農分野です。私の高校では豚と鶏しか飼育していませんでした。座学で牛の基礎を学んだことはありますが、実践的な管理作業は行ったことがありません。そのため、畜産研究センターでの課業を通し

て、肉牛や酪農の可能性を試したいと思っています。実習で取り組んだ乳牛の TMR 作り、給飼・搾乳・除糞、また、愛媛ブランド牛『あかね和牛』の管理作業はどれも貴重な体験となりました。今後も誰よりも貪欲な姿勢で、新しい分野を開拓していきたいです。

二つ目は養豚分野です。高校では養豚・養鶏を学びましたが、特に養豚に力を入れてきました。この経験を踏まえ、更に上へステップアップしていきたいです。畜産研究センターの豚舎は高校と比べて、豚舎構造・飼育頭数・品種などの規模が違い、新しい学びばかりでした。特に初めて見る『甘とろ豚』の飼料や管理方法は、養豚の奥深さに気付かされました。また、実習だけではなく、家畜衛生やふん尿処理の講義についても理解を深め、付けた知識を実践に結び付けられるようにしたいです。

三つ目はスマート農業です。特に日本は、昔ながらの手法や技術が肯定されがちですが、今や畜産界でも膾炙感センサーに基づき肉用牛の分娩時期を判断するなど、ロボットや AI の活用が当たり前になっていきます。また、このような技術を活用し作業を効率化することで、国内だけではなく世界でも戦える畜産物を作れると私は考えています。しかし、活用

されている実物を見たことがありません。そのため、先進農家体験学習を通して、今後の畜産はどうあるべきか、何が必要なのかを学び、今後の畜産界をけん引できる人材に成長したいです。

これまで多くの人と出会い、多くの経験をしてきました。そして、私の憧れである「畜産のスペシャリスト」の恩師に出会えたことは私の財産だと思っています。しかし、高校で学んだことは基礎であり土台です。農業大学校に入ってから、この「知識の積み重ね」ができていくことを日々実感しています。九月の実習で、専攻を酪農に決めました。酪農は座学でしか学んだことがないため、毎日が分からないことばかりです。しかし、新しいことを学ぶ姿勢は誰にも負けません。それは高校での経験でそうだったのか？もしくは「銀の匙」の影響かもしれません。そして今は、畜産研究センターの職員に様々な就職先を紹介して頂いています。酪農に関わる仕事か、それとも畜産全体に関わる仕事か。それをこの二年間の講義・実習を通して決めたいと思っていますが、やはり私は「畜産」そのものが好きです。例に挙げるならば家畜改良センターなど、畜産の魅力や伝え、畜産という産物をさらに活性化させることができるような仕事に就きたいと考えています。夢は叶えるためにあります。この農業大学校で悔いのない二年間を送りたいです。

立派な柑橘農家を目指して

愛媛県立農業大学校

総合農学科 一年 果樹コース

白石圭佑



私が住んでいる八幡浜市は山と海に囲まれ、三つの太陽（①空に輝く太陽、②

海に反射する太陽、③斜面の石垣から反射する太陽）が、段々畑を明るく照らす町でもあり、また全国屈指のブランドみかんの産地です。そんな八幡浜市で私の家は、柑橘専門農家を営んでいます。温州みかんを始め九品種の柑橘を栽培し、農地面積約三ヘクタール、年間百トン出荷しています。

収穫時期はとも忙しく、小さい頃から手伝っていました。急斜面の段々畑での収穫作業はすぐ体力を消耗され、そのあと夜遅くまで選別作業をする、精根尽き果ててしまいます。私はそんな収穫・選別作業が大嫌いでした。ただ、必死に働く父の姿を見て、将来は立派なみかん農家になるという自覚が芽生えているのを感じました。

就農を目指し進学した高校では、柑橘栽培の基礎について勉強するとともに、グローバル GAP 認証取得、柑橘販売、先進農家研修など貴重な体験をすることができました。高校三年生には柑橘農家になるという夢が更に強

くなり、実践的な講義・実習ができる農業大学校へ進学しました。

私は、在学中にチャレンジしたいことが三つあります。一つ目は資格取得です。園地造成に必要な小型車両系建設機械資格、コンテナなどを運ぶフォークリフト運転技能講習資格は既に取得できました。今後も多くこの資格を取得し、将来の経営に繋げていきたいと考えています。

二つ目は実習です。実践的な知識は勿論、体力・経験も身に付きます。卒業後は、実家の即戦力となれるよう、分からないことは先生・先輩に聞き、自ら学ぶ姿勢を身に付け、さらに指示を待つのではなく、自らが考え効率的に動いていきたいです。

三つ目は接客対応を身に付けることです。高校でも販売体験はありましたが、上手くできませんでした。コミュニケーション能力を身に付け、多くの商品を売ることが出来るように努力していきます。

私の将来目標は、「時代の流れに合わせて柔軟に対応できる農家」になることで、そのために実践したいことが三つあります。一つ目は、グローバル GAP の考え方を取り入れることです。高校時代に学んだグローバル GAP の考え方、知識を農大で更に深め、実家の経営に取り入れたいと考えています。グローバル GAP を取り入れることで、農作業の効率化や生産性の向上ができると思っています。

二つ目は、新品種や有望品種等を積極的に取り入れることです。我が家は、繁忙期の大半を温州みかんが占めており、繁忙期と閑散期がはっきりと分かれています。そこで温州みかんの栽培面積を減らし、閑散期の七〜八月に収穫できる新しい品種等を導入する経営を考えています。そうすることで繁忙期と閑散期が区別されることなく、労力を分散することができます。

三つ目は、インターネットで販路を拡大することです。現在、我が家のみかんはすべて農協に出荷しています。しかし、出荷ルートが農協だけだと、販売を任せっきりで市場に単価が左右され不安定です。インターネットの利用者は年々増え続け、農作物のインターネットでの販売需要が高まっているため、取り入れようと考えました。ただ、ここで上げた販売方法に限らず、



令和3年度先進農家等 留学研修報告書

高知県立農業大学校
園芸学科 二年 野菜専攻

小川 周 吾



1 研修先の概要

私が研修させていたのは、芸西村で促成ナスの栽培を行なっている N さんです。栽培面積はハウス 38a で栽培品種は、慎太郎で、試験的に行っているおもしろい誘引試験をしていました。雇用状況は N さん夫婦と、農福連携事業で雇用者が 3 人います。出荷先は、農協と、市場に出荷しています。日射比例かん水装置や環境測定装置、炭酸ガス施用も行っており、受粉はマルハナバチを使用していました。

2 研修内容

研修させていただいた作業内容は、

ナスの収穫、出荷の手伝い、糸の巻きつけ作業、摘心、芽かき、摘葉、内張り、ダクトの設置です。

N さんの環境制御のやり方は基本的に、測定器と樹勢の具合、月の満ち欠けで、炭酸ガスと温度管理をして、生殖成長、栄養成長の調節をし、1ヶ月前から着果数を増やす管理をしていました。11月後半は、着果数が落ちてきたため、上位2枚を残し、それ以外のすけ葉と主葉をすべて摘葉し、芽のふきを良くしてから、炭酸ガスと葉面散布で糖を補いながら樹勢を保ちつつ、12月の着果数を増やすように管理作業をしていました。病害虫対策は、早朝の昇温管理で湿度を逃がしつつ温度を保つ環境を作り結露を防いで、できるだけ薬剤散布の回数を減らす工夫をしていました。

施肥管理は、複合肥料をできるだけ使わず、単肥の肥料を使い樹勢や葉脈、葉先などをみて、土壌の成分を把握し、必要な分の単肥を必要な量だけ混ぜて、肥料をやっています。また単肥を使うことによって経費を削減することができ、その分炭酸ガス施用での高い灯油を使うことができているそうです。

経営面で N さんの考え方は、収益を目標にするのではなく、収量を重視しているそうです。理由は、収益重視になると、収入が少ない月があると、その時に灯油代など費用を減らしてしまう、その後の収量が落ちてしまうた

め、収益が少ない月でも目標のt数が取れていけばよいという考え方で。最悪単価が安くても、量で補って収支がマイナスにならないように経営しているそうです。実際にいるんな農家さんを回っても、ナスの単価が安いときに、炭酸ガスを施用している農家さんは少なかったです。Nさんのモットーは去年の失敗を生かし、去年より少しでも多くt数をとることだそうです。

3 感想

今回の留学研修では、ナス作りにおいては学校では学べない考え方や環境制御技術、どうしてそうなるかという根拠のある栽培を学ぶことができました。自分の考え以上に、ナスの栽培は奥が深いと思いました。栽培の知識、土の知識、天候の対応の仕方、経験はもちろん知識の差で、ナスの量、質に違いがあるので感じました。農業は栽培スキルと経営スキル両方がないとなかなかうまくいかないと感じ、思い通りに収量が伸ばせなければなら、すぐやりがいがあり楽しいだろうと思いましたが、スキルを磨くためには、人に聞くのが一番早く、情報共有はいろんな分野で必要になると学びました。「聞くのは一時の恥、知らずは一生の恥」ということを言われていました。

留学研修を終えて、講義や授業を受ける中で、留学研修で学んだことと、つながるところが多く、前に比べて別の視点で思考でき、講義や授業が面白くなりました。自身のために本当にた

くさん学ぶことができた研修だと思いました。本当に、ありがとうございます。

私の考える耕作放棄地問題について

高知県立農業大学校

園芸学科 一年 野菜専攻

竹澤 柳



今現在、日本では様々な問題を抱えているが、その中に『耕作放棄地問題』がある。

農家の高齢化や若い担い手不足により、農家の数は減り、代わりに維持できなくなった田畑が増えてきている。維持されなくなった田畑はしだいに荒れ果て、耕作放棄地となる。私の実家のある農村でも、耕作放棄地が拡大し続けている。使わない土地を放置しているだけの耕作放棄地だが、何も問題はないのだろうか。問題があるとすれば、それはどんな問題なのだろうか。

全国で約40万haあるとされている耕作放棄地だが、一般的に、食料自給率の低下が懸念されている。食料の多くを輸入に頼っている我が国にとって、早期に解決したい要項の一つではないだろうか。そんな耕作放棄地問題だが、

範囲拡大に歯止めがかからない要因の一つに、若者の就農率の低さが挙げられる。土で汚れることを嫌う現代人は、汗と泥にまみれる農業には関心を示さず、安定した給料の出る清潔な職場を求めている。最新の農業では、水耕栽培やロックウール栽培など、土を使わない栽培方法も普及し始め、初期投資さえすれば清潔な環境で作業することが可能になった。何にも必要以上に土をいじらなくてよくなったのだ。しかし、若者達がそれらのメリットになびくことはあまりない。考えられることがあるのではないだろうか。若者が職を探するとき、職業のイメージというものをも大切にしている。そんな若者から見れば、農業という職業は、決して華やかな印象もなく、就職の候補として、上位に上がってくることはないのだろう。現代の若者達に農業に興味を持つてもらうには、農業が持つ負のイメージを払拭することが必要である。実際に農業が儲かっている例を見る機会を作ることも大切だ。また、自分が考えた、自分だけのやり方が出来るといった農家個人のオリジナリティのある技術をアピールし、農業が自由な職業だと伝えていかなければならない。

耕作放棄地の問題は、私達の身近なところでも多大な影響を及ぼしている。私の住む高知県の放棄地の面積は、約4千haあり、そのうちの約五百haは

私の地元の市町村が抱えている。私の実家のある中山間地域の農村では、少子高齢化の影響が著しく、限界集落と呼んでも差し支えないほど、人口が減少している。農業を営む村人の過半数が高齢者であるこの地域は、亡くなった人の土地が後世に引き継がれず、また誰の土地だったのかも定かではない荒れ地が数多く存在している。放棄地が増えることで問題となるのが、景観の悪化に繋がることや、野生動物の住処となることだ。荒れ放題の土地の景観はあまり良いとは言えず、田畑の景色を売り込んでいる農村にとって、見栄えの悪い土地は邪魔でしかない。また、野生動物に住み着かれるのも非常に厄介だ。作物が実る田畑に近く、昼でも身を隠すことができる放棄地は、野生動物にとつては食料を調達するためのベースキャンプのようなものである。農村にとつて悪影響を与える放棄地を減らしていくために、将来私は、農家として地元へ貢献する傍ら、若きリーダーとして、次のような対策を考えている。まず、土地の情報を管理し、農地に手を入れるようにする。次に、その土地の整備を行い、使いやすい農地へと変える。その土地に、地元を盛り上げる事ができる作物を植えたいと考えている。植える作物の例として、もともと地元の特産品となっているブシユカンや、加工品のバリエーションが豊富な水稲などが良いだろう。また、需要があり、商品価値の高い作物を栽



小松 星 士

高知県立農業大学校
園芸学科 一年 野菜専攻

私の目指す農業について

耕作放棄地を減らすには、多くの時間と資金、画期的なアイデアが必要である。資金やアイデアはすぐには用意できなくとも、時間ならば始めるのが早ければ早いほど多く取れる。学生であるうちは、出来ることも少ないだろうが、今からでも、情報を収集し知識を蓄え、仲間との友好関係を築くなど将来に備える事が大切であると私は考える。近い未来、私達若い力が問題の解決に役立つと信じ、勉学に励んでいる。

私は高校卒業後、教員になるために県外の大学に進学した。しかし、

培すれば、地元の活性化が期待できるだろう。このような活動をするための資金は、補助金や、クラウドファンディング等の方法でまかないたいと思う。また、収穫した作物やその加工品を支援してくれた人に還元しようと考えている。事はそう簡単なものでないことは重々承知しているが、何か対策をしなければ問題が解決することはないであろう。

耕作放棄地を減らすには、多くの時間と資金、画期的なアイデアが必要である。資金やアイデアはすぐには用意できなくとも、時間ならば始めるのが早ければ早いほど多く取れる。学生であるうちは、出来ることも少ないだろうが、今からでも、情報を収集し知識を蓄え、仲間との友好関係を築くなど

コロナの影響もあり半年で大学を辞めた。高知県芸西村にある実家では、私が生まれる前からピーマンを栽培している。大学を辞めてからは、実家のハウスの作業を手伝っていた。農業のことをもっと深く学びたいと思い、農大を受験した。私が農業で一番興味を持ったのは、ピーマンの収穫作業です。自分が育てた野菜が毎日毎日大きく成長することが、こんなに嬉しいことだと私は初めて実感した。今、大きな問題だと考えるのは、農家の高齢化による農家人口の減少である。高知県全体の農業就業人口を見みると、十年間で約32%減少している。芸西村でも同様に農業就業人口が減少している。そこで次代の担い手として、私は農家になることを決意した。

私は農家の高齢化については次のように考える。若い人たちは農業はとてつらいイメージがあると考えられる。実際、機械化、自動化は進んだが、大変な作業は今もなお多くある。しかし、その分やりがいも感じられる職業であると思う。ピーマンは苗から育て、一年を通して栽培・出荷する。自分が育てたピーマンが高知県内だけではなく、全国各地に出荷され、多くの人たちに食べてもらえると考ええると、生産者にとってはとても嬉しいことだ。このような農業の楽しさを若い人たちに知ってもらうためには、どうすればよいか考えた。まずは、小学生から、農業について学ぶ時間を増やす

べきだ。学校の授業で少しでも農業に関わる機会が増えれば、農業への関心が深まり、農家を目指す人も増えるのではないかと。就農すれば地元の青年部に入り、若い人たちが農業に関わる機会を増やして、農業に対するイメージを変え行動を率先してやりたい。発展してきた農業をこれから先もさらに前進させたいと考えている。

私の地元の芸西村は、多くの自然に恵まれている村だ。村内は、施設園芸が盛んで主に施設を利用した冬春ピーマンやナスなどの野菜、花きが栽培されている。中でもピーマンは、県内では土佐市に次いで出荷量が二番目に多く、令和2年度は24%出荷された。また、野菜だけでなく花きのダリアは県内で最も多く出荷されている。実家は、父が六年前に後を継いだ。現在では45アールの面積を家族二人とパート二人の合計四人で栽培している。農業技術の発展により、実家では炭酸ガス発生装置を導入し、反収が20トンから24トンに増えた。こうした農業をとりまく生産環境が発展し、進化してきているといった情報を発信し、農業の生産現場の現状を多くの人に知らせる必要がある。

私は地元の農業の発展に貢献したいと考えている。農業は努力すればするほど、作物はその努力に応えてくれる。そういったところも農業の魅力ではないか。私は農家になって農業の魅力を伝え、芸西村をはじめ高知県の農業就

業人口の増加、農業の発展に貢献したいと考えている。

私は、施設園芸に適した芸西村で若い農家の力を結集して、品質を日本一にしたい。特に実家で栽培しているピーマンは肉厚でとても美味しいので、ピーマン部会の人たちと一緒に積極的に販促活動を行い、全国の人に食べてもらえるようにしたい。

そして、多くの子どもたちや、若者に農業の楽しさを知ってもらうために、ハウスの収穫体験や出前授業などを行いたい。芸西村の農業に貢献するために私にできることは、農業の楽しさや大切さを伝えることだと考えている。そして、自分の経験を多くの若者に伝え、地域の農業に貢献できる人になり、しんどい農業から楽しい農業にしていきたい。

農業大学校を卒業して実家のピーマン農家を継ぎ、安定した経営をするために、本校で農業の基礎を学び、自身が体験した農業の楽しさや大切さを胸に刻みながら取り組みたい。実家のハウス経営だけでなく地域全体の農業を維持・発展できるように努力し続けた。

